

「論文」

榎本武揚「共和国」言説に関する一考察

濱口裕介

はじめに

幕末維新の移行期、箱館を占領した榎本武揚らが打ち立てた蝦夷島政権は、「蝦夷共和国」「蝦夷共和国」
「榎本共和国」「箱館共和国」などの名で呼ばれることがある。本稿の目的は、この蝦夷島政権を「共和国」と称する言説について考察することにある。

榎本の「共和国」などといっても、近年では歴史学者の間ではその存在を支持する者はほとんどおらず、好事家による単なる「俗説」程度にしか思われていないかもしれない。¹ たしかに、「共和国」が実態として存在したかといえ、後述するように史料的な根拠は乏しく、その点は大いに疑問がある。

しかしながら、近年議論されることの少なくなったこの「共和国」言説も、かつてはたびたび歴史学者の著作や学術雑誌に取り上げられた歴史があるのである。

たとえば、かつて北海道史研究者の井黒弥太郎は「箱館戦争新論」という論文で「共和国抹殺」を唱えた。

このなかで井黒は、箱館戦争中に榎本武揚らが樹立した蝦夷島政権を「共和国」と呼ぶ論者（特に後述する木村毅）に対し、その根拠に対して一々反証し、断固としてこれを認めない姿勢を示したのである。

なぜこれほど「共和国抹殺」にこだわったのか。彼は北方領土問題と米軍占領下の沖縄を取り戻す必要を説き、「国民の一人一人が、より正しくより厳しい領土観念に貫かれていることこそが、先づいて、要請されなければならない」と唱えている。日本人は、この「南と北に蚕食されたわが領土」を取り戻すという国民的課題を背負っているというのに、なぜ軽々しく領土問題に不利な議論、国土の分断を喜ぶような議論をして、他国につけ入るすきを与えるようなことをいうのだ——要するにこれが井黒の主張だった²。

ここに明らかなように、榎本の「共和国」をめぐる議論は、実のところきわめて政治的な言説だったのである。そもそも君主政の否定を含意する「共和国」という言葉じたい、天皇制の否定につながりかねない言説である。しかも、井黒が警戒するように、日本の領土内に「共和国」が存在したと主張するのは、単一国家としての日本像を危うくするという側面があった。

また、それと裏腹の議論として、田中彰は、明治以降「内国植民地化」された北海道のひそやかな自己主張、「一種のシニカルな抵抗感」をもつ北海道イメージとして「共和国」が語られてきた可能性を指摘している³。事実とすれば、これも「共和国」言説がもつ政治性の表れといえ、注目すべき論点であろう。

こうした政治性を帯びたことばであった「共和国」言説は、いつ・どのような背景のもとで流布したのであろうか。

以上のような関心を念頭に置きつつ、本稿は「共和国」言説について考察する準備作業として、この言説が成立し、社会に普及した経緯をたどることを目的とする。なお、こうした分析には、本来膨大な資料の収集と解析が必要である。筆者にその準備があるかといえは甚だ心もとなないのだが、従来こうした検討が行わ

れていないことに鑑み、本稿ではともかくもある程度の見通しを示すことをめざしたい。

1 舶来品⁴だった「共和国」言説

一八六八（明治元）年末、榎本武揚率いる旧幕府艦隊が箱館を占領したことで、戊辰戦争最後の戦いである箱館戦争が幕を開けた。その際、榎本が五稜郭を拠点に暫定政権を樹立し、その指導者を選出するために「入札」を行ったことはよく知られている。また、榎本は英仏など各国の領事にみずからの政権を「事実上の政権」として認めさせることに成功した。⁴ 蝦夷島政権を「共和国」とする言説は、このふたつの事実、すなわち「入札」を行ったこと（『共和政』の採用）と、欧米諸国から独立した政権として認められたこと（『独立国』の成立）を根拠として生まれ、広まったようだ。

それでは、この政権を最初に「共和国」と表現したのは誰だろうか。

蝦夷島政権の関係者のなかにもこの政権を独立政府と認識していた者はいたようであるが、「共和国」を樹立する構想だったと証言している者は見当たらない。強いて関係者のことばを探すと、蝦夷島政権に誘われたという挿話を持つ渋沢栄一が、講演のなかで榎本の「共和国」構想にたびたび言及しているのが目につく程度である。⁵ もっとも、渋沢の発言は箱館戦争から数十年というかなりの年月が過ぎてからののであるため、当時そのような認識が存在したかという観点からはあまり価値を持たないであろう。

すなわち、少なくとも史料にもとづく限りは「共和国」樹立の構想は存在しなかったといえるのである。ところが、本人たちの認識とは別に、この政権を「共和国」のようなものと認識していた者は、箱館戦争当時から存在した。それは、当時日本に滞在していた西洋人たちである。

たとえば、M・ウィリアム・ステイルは、箱館駐在のアメリカ副領事ライス N. E. Rice が「蝦夷の偉大な共和国政府は崩壊した」と記している外交文書や、横浜の英字新聞『ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メール』*Japan Times Overland Mail* が「徳川脱藩家臣団が共和国樹立を宣言」と伝えていることを紹介している。⁶

ほかにも、イギリス公使館書記官を務めていたアダムス Francis O. Adams や、少し遅れてアメリカから招聘された化学者グリフィス William Elliot Griffs がそれぞれ著書で蝦夷島政権を指して republic の表現を使っていることが知られている。⁸ また、筆者も当時長崎に滞在していたオランダ人の薬学者ヘールツ Anton Johannes Cornelis Geerts が「旧徳川兵たちは蝦夷島において共和国の声明を行った」などと記しているのを見出した。⁹

ただし、欧米人たちもその「共和国」が士分のみによる投票で成立したことを冷ややかに見ており、一種の比喩的表現として「共和国」の語を用いている者が大部分のようだ。たとえば、ヘールツも蝦夷島政権を「共和国」の名で呼びつつ、次のように注記することを忘れていない。

続いて、太鼓、ラッパおよび旗による祝賀行列が、新政府の所在地として内定していた亀田 Kamida（五稜郭の所在地 濱口注）に向かって行なわれた。人々はこの場所でこの時に共和国創始の式典を祝った。ただし商人、芸人、職人、農民、それに二本の帯刀を許されないすべての低い階級の者を除外して、一般（!!）選挙権を、彼らの憲法の基礎とすべきことが決定された。¹⁰

ここには、蝦夷島政権を積極的に「共和国」と認め、その誕生を礼賛する姿勢は見受けられまい。むしろ士分以上による「入札」で政権担当者を決定したという、「共和国」らしからぬ点を揶揄する書きぶりである。

そもそも、英米蘭などの国の外交団も、のちには局外中立を撤廃し、明治新政府を単一の日本政府と認める姿勢をとっていることから、最終的には榎本らのことを「共和国」どころか独立政権としてすらも扱わなかったのである。

このように、箱館戦争当時、日本に滞在していた欧米人の間では、蝦夷島政権を「共和国」と表現する例がすでに散見されるものの、彼らのいう「共和国」ということは文学的な装飾、一種の「カリカチュア」という側面が濃厚だったのである。¹¹ もっとも、ここで大事なのはこうした文脈ではなく、「共和国」ということばが使用されたという点である。ことばは、話者の思惑とかわりなく独り歩きを始めるものだからだ。

2 「絶対禁絶のタブウ」の時代

前節で見たように、西洋人たちは蝦夷島政権を「共和国」と称していた。西洋国際社会と接する機会が増えた明治期以後、この興味深いことがらに着目する者は、日本でも少しずつ現れたことだろう。

ところが、明治から昭和戦前期までの間に世に出た文献のうち、蝦夷島政権を「共和国」と称しているのは非常に数が限られているのである。文字どおりの管見ではあるが、明治期から昭和戦前期の間に公刊された著名な文献といえ、歴史書では竹越与三郎『新日本史』上巻（民友社 一八九一年）、文芸作品では久保栄『五稜郭血書』（日本プロレタリア演劇同盟出版部 一九三三年）が挙げられる程度ではないだろうか。

ここでは、この二書を簡単に紹介しておこう。

竹越の『新日本史』は、まだ『現代史』であった明治維新を「民友社系平民主義思想」に立って総括的に描いた画期的な史論書である。¹² そのなかで榎本らが「北海道に共和国を立つると称して大統領を立て」た旨

を記している。¹³これは恐らく日本人の著作のうちで蝦夷島政権を「共和国」と称した最初期の文献と考えられる。出典は記していないものの、イギリス史に造詣が深かった竹越のことであるから、蝦夷島政権を「共和国」と表現した洋書を参照して右のような記事をのこした可能性が高い。

一方、久保栄のプロレタリア演劇『五稜郭血書』は、明治維新が「還暦」を迎え、ようやく歴史学の研究対象になりつつあったばかりの一九三三（昭和八）年に上演され、初演とともに刊行された。本作は文芸作品とはいえ、英仏資本の対立という国際環境を踏まえて明治維新に「芸術的解明」を加えるという、当時まだ歴史学者も立ち入っていない領域に踏み込んだ画期的な作品であった。¹⁴初演時に「明治初年政治絵解」という頭書を付していたのは、この作品が明治維新の本質の究明をめざした作品であることを物語っている。

もっとも、本作は史実以上に英仏対立をディフォルメする視点に立っており、榎本はフランスの傀儡として扱われている。その榎本に、フランスの軍事顧問「ぶりゅーね」は「一切平等を装った共和民権政治の宣布——これを措いて、一般庶民に新しい幻を植えつけ、下々の不平不満を眠らせる餌が、何処にありますか」とけしかけ、ニセの「共和国」を建国させようとするのだ。¹⁵そして、この美名に期待をかけた郷土たちが裏切られ、彼らの血が流された先に明治の新時代が始まる、というのが本作の筋書きである。なお、本作は構想段階では、「五稜郭共和政府」「箱館共和政府」「北海道共和国」などの題名も候補に挙がっていたらしい。¹⁶「共和国」の問題を正面からとらえた最初の文芸作品でもある。

このように、やはり欧米で蝦夷島政権が「共和国」の名で呼ばれたことに気づき、著作でこれを取り上げる者もいた。ただし、右の両書はあくまで例外的な存在というべきである。前述のとおり昭和戦前期までの間には「共和国」という表現は大っぴらには使われておらず、榎本の「共和国」言説についても広く認知されていたとは考えがたいのである。

そもそも「共和主義」やそれに類する君主制否定の概念を公にすることじたい、特に自由民権運動が下火に向かった明治中期以降には困難な状況になったといわれている。¹⁷ 後述する木村毅の大仰なことを借りれば、「共和国」は「絶対禁絶のタブウ」であり、「一たび、ちよつとでもこれに触れると、それは切斷した高圧電力線にさわるようなもので、ただちに死を意味した」のである。¹⁸ これは誇張表現であるとしても、共和演説事件のような例を想起すれば、近代日本において天皇制の否定とられかねない表現がいかに困難だったかは容易に想像できるところである。

3 木村毅と在野の歴史家たち

前節で確認したとおり、戦前まで蝦夷島政権を「共和国」と表現することは一種のタブーであった。しかし、一九四五（昭和二〇）年に日本が太平洋戦争に敗れ、連合国軍占領下で言論の自由が保障されると、日本に壊滅的被害をもたらすに至った明治以来の歴史を見直す機運が高まった。

これを機に「共和国」について議論することも可能になったわけだが、戦後しばらくの間は「今日北海道共和国などという国の名前を知る人は少なからう」¹⁹、「この北海道の共和国については誰れも注意をはらわず、今も払われているとは思わない」といわれていた。ところが、一九六〇年代後半になると、「『えぞ共和国』と称するのが後世の定説」²¹、「榎本らが、『蝦夷共和国』を樹立したとする形容は、余りにも有名」²²と評されるまでに「共和国」言説は人口に膾炙していったのである。

それでは、一九四五年から六〇年代後半の二〇年ほどの間、どのような経緯から「共和国」言説は市民権を得るに至ったのであろうか。本節と次節では、この点について考えてゆく。²³

言論の自由が保障された戦後数年間は、明治以来国家に独占されてきた歴史を取り戻し、戦前の皇国史観でタブーとされてきた歴史の暗部に切り込もうという試みが繰り返された。たとえば、滝川政次郎の『日本歴史解禁』（創元社 一九五〇年）、蜷川新の『維新正観』（千代田書院 一九五二年）、村雨退二郎が『特集 人物往来』第一巻第八号（人物往来社 一九五六年）の「禁じられた歴史」特集に寄稿した「榎本武揚・北海道共和国の興亡」などである。いずれも、タブーからの解放の姿勢が書名からはつきりとうかがえよう。

論者たちに共通しているのは、本職の歴史家ではないものの非常な博学であり、独自の方法で歴史を探索した人々、つまりは在野の歴史家だった点である。彼らはある種の使命感をもって、戦前は隠されていた史実を暴いていった。そして「共和国」の存在も、タブーからの解放という文脈において積極的に紹介していたのである。

こうした在野の歴史家の系譜につらなり、特に「共和国」の紹介にこだわりつづけたのが、さきにも触れた木村毅であった。木村は博覧強記で知られた文芸評論家・作家・明治文化研究家であり、在野の歴史家でもあるという多彩な活動で知られた人物であった。²⁴ 本稿の冒頭で紹介した井黒弥太郎が「共和国抹殺」を訴えた際、「共和国」の喧伝者としてやり玉に挙げたのも木村であった。

そもそも木村がなぜ「共和国」の存在を信じるに至ったかという点、そのきっかけは前述した竹越の『新日本史』を読み、「共和国」の字句を見つけたことだったという。²⁵ 木村は驚き、その後国内外の諸書をひも

といて独自に調べ上げ、「共和国」が実在したとの確信に至ったという。木村にとって「事件」ともいえるべきこの「共和国」の発見は、一九二五（大正一四）年ごろのこととい

う。²⁶ これは木村が吉野作造を介して明治文化研究会に出入りし始めた時期にあたる。²⁷

ここで注目されるのは、これまた在野の歴史家であり、法律家としての知識を駆使して法制史の研究を進

めたことで知られる尾佐竹猛が明治文化研究会の同人にいたことである。彼は、蝦夷島政権が諸外国から交戦団体として認められ、中立を宣言されていたという説を最初に唱えた人物だった。²⁸恐らく木村はこの尾佐竹の説に触れたことで、みずからの「共和国」実在説を補強できたことだろう。

それにしても、木村の「共和国」に対する執着は相当なものであった。「いささか人の意表をついた、みんなでは思いも及ばない題材を見つけて、読者を戸惑いさせる」ことを好んだ木村にとって、これは格好のネタだったのだろう。²⁹そのため吉野作造に紹介状をもらってわざわざ函館まで調査に赴き、また同じく明治文化研究会の同人であった歴史家藤井甚太郎にこの問題を発表するよう訴えたりもしたという。³⁰

だが、同時に木村は、この問題を取り上げることの許さない雰囲気があることも悟っていた。例の「絶対禁絶のタブウ」である。そのため、結局戦前はこの発見を公にすることができなかったようだ。

とはいえ、木村にとってこの「タブウ」の存在は自説の補強にもなりえた面があることも見逃せない。

「共和国」樹立を明言する文献は、欧米にはあるにもかかわらず、日本国内でほとんど見当たらない。繰り返しになるが、これは榎本にそもそも「共和国」樹立の意志がなく、欧米人が「共和国」という表現のルーツというだけのことである。しかし、木村はそうするには解釈しなかった。『共和国』は存在したにもかかわらず、「タブウ」のせいであれもそのことを発言できないため、これを証明する文献が見つからないのだと分析したのである。

ずいぶん勝手な解釈だが、このように見れば、「共和国」のことを記した史料が日本国内に見当たらずとも、木村の説はゆるがない。そして、ますますタブウを暴くことの重要性は増すことになるのである。

さて、言論の自由が保障された戦後、木村はようやく「共和国」のことを公にする機会に恵まれた。管見の限り、木村が「共和国」の存在をはじめて取り上げたのは、一九五三（昭和二八）年の明治文化記念講演

会（法政大学史学会主催）における講演「明治の政治に及ぼしたジョージ・ワシントンの影響」である（『法政史学』第六号に講演録が収録されている）。ついで翌年公にした著書『文明開化―青年日本の演じた悲喜劇―』（至文堂）においても、榎本武揚が建国した「北海道共和国」の実在を訴えた。このとき、『新日本史』で「共和国」の語を目にしてから三〇年もの歳月が流れていた。『文明開化』は広く読まれたらしく、井黒をはじめとする本職の歴史学者たちが「共和国」について言及（批判）する際にもたびたび引用されている。戦前のタブーを暴こうという一時のブームが去り、「共和国」の存在を声高に唱える者が少なくなっても、木村はさまざまな媒体で「共和国」の存在を吹聴しつづけた。たとえば、『毎日新聞』に連載した「大東京五百年文化史話」においては次のように記している。

それは、たとえおもちゃのように小さくても、共和国だったのだ。それは東洋にできた最初の共和国なのだ。いな、欧米の白人以外、有色人種がつくった世界最初の共和国だ。明治三十三年にアギナルドがフィリピンを独立させて共和国の成立を宣し、これこそ東洋にできた最初の共和国だと誇称したが、それは、それより三十余年前に、北海道に共和国が誕生したことを知らなかったからである。³¹

榎本の「共和国」を紹介する際、その枕詞として「アジア最初の共和国」という表現が散見されるようになるが、これも恐らく木村の右のような表現に影響を受けたものであろう。戦前まで口の端にも上らなかった榎本の「共和国」は、ここに至って一足飛びに世界史上の一大事にまで担ぎ上げられたのである。

こうして、木村をはじめとする在野の歴史家たちの著作により、「共和国」の存在はじょじょに浸透していった。むろん、著作が公になるだけで流布することが約束されているわけではない。その背景には、連合国軍の占領下における民主化政策、アジア各地における独立闘争や河野広道の『北海道自由国論』（一九四六

年)に始まる北海道独立論の登場など、国内外の情勢が「共和政」や「独立」に関する問題への関心を高めたといい事情があった。こうした条件の重なりもあり、榎本の「共和国」をめぐる問題も耳目を集めるに至ったのである。

4 羽仁五郎・井上清の描いた「共和国」

前節で確認したとおり、「共和国」言説の浸透に木村毅をはじめとする在野の歴史家たちが与ったことは間違いない。ただし、筆者はここで、在野の歴史家のいい加減な考証の結果、誤った歴史認識が広まってしまった³² などというストーリーを語るつもりはない。いや、むしろ学界に身を置く歴史学者のなかにも「共和国」が存在したとする説を否定する者ばかりではなく、むしろ積極的にこれを広めようとした者もいた点を強調したいのである。

本節では羽仁五郎・井上清といった戦後歴史学を代表する歴史学者たちが「共和国」を積極的に喧伝していたという忘れられた事実注目してゆく。

そもそも言論の自由が保障された戦後、だれよりも早く「共和国」の存在を紹介したのは、おそらく羽仁五郎であろう。一九四六(昭和二一)年正月のいわゆる「天皇人間宣言」を受け、羽仁はその直後から新聞に「天皇制の解明」を寄稿している。その文中、日本が共和政となる必然性を語るなかで、中世の堺のような自治都市とともに「維新当時、北海道には、一時、共和国が樹立された」ことを紹介しているのである。³³

羽仁のもとで学んだ井上清も、連合国軍占領下に編まれた国定教科書を批判した『くにのあゆみ批判——正しい日本歴史——(解放社 一九四七年)』において、「幕府の海軍は北海道の函館を占領し、同地に蝦夷島

共和国をたて、全軍の選挙で榎本武揚が総裁（大統領）に就任して中央政府に抗戦した」という叙述を展開している。³⁴

さらに、一九四九年に世に出た奥山亮の『新考北海道史』も注目に値しよう。従来の開拓史観からの脱却を試みた画期的な北海道史叙述として知られる同書は、「北海の一角に日本政治史上注目すべき共和国、または自由国ともいふべきものをつくりだしたのである」として榎本の「共和国」を紹介している。³⁵これは、北海道史の通史にはじめて榎本の「共和国」が言及された例であろう。

実は、ここにも羽仁と井上が関係していた。奥山による同書の自序によれば、著述にあたり羽仁・井上らから「榎本武揚のエゾ共和国、また原始的蓄積の問題など、とくに有力な意見を提示された」とわざわざ記しており、やはりふたりの影響があったことが判明するのである。³⁶

羽仁や井上が蝦夷島政権を「共和国」と見る認識に至った経緯は不明であるものの、前述した尾佐竹の説に加え、久保の『五稜郭血書』の影響があった可能性は高い。というのも、久保は羽仁の一時時代の同級生で、ともに文芸部に在籍した仲だったのである。戦後は久保が設立した俳優学校で羽仁が講師を務め、久保が自殺した際にも羽仁は追悼文を寄せている。³⁷羽仁や井上は久保本人と同様に『五稜郭血書』をすぐれた歴史の「研究」成果、「芸術的解明」と見ており、少なくともその影響があったことは想像しうるところである。

ところで、前節で紹介した木村毅と羽仁・井上は、ともに「共和国」の存在を強調した点では一致している。だが、榎本武揚に対する評価は正反対である。木村が「共和国」を樹立するという功績を成し遂げた榎本を「いま最も注目する人物」「えらいぞ江戸っ子」と無邪気に評価するのに対し、人民史観に立つ羽仁や井上は、久保の『五稜郭血書』と同様そうした視点には立たない。たとえば井上は後年、『五稜郭血書』を評するなかで、榎本の共和思想を「欺瞞」として描く久保栄の箱館戦争観を「この解釈は非常に正しいと

思うんですよ」「その見方は史実としても正しいと私なんかは考えている」と語っている。³⁸ 榎本の「共和国」が存在したことじたいは注目するものの、その価値を認めることについては消極的という屈折した見方なのである。

それでは、羽仁や井上が蝦夷島政権を「欺瞞」の「共和国」と見ながらも、これほどこだわるのはなぜだろうか。

一義的には、終戦直後のマルクス主義者たちの間で、日本「民族の誇り」「国民的誇り」を革命と自治の歴史に求めるという方針があったことが指摘できる。³⁹ 言い換えると、日本人は天皇制を廃止してもみずから手で国を統治する力量があるという点を歴史から証明することが彼らに求められていたのである。たとえば、『くにのあゆみ批判』は、幕末には「民衆の生活の中で真の公議輿論の民主主義が芽生えていた」と日本の民衆に内在的な民主主義の志向があったとし、さらに「外国の民主政治に関する知識とむすびついて、立憲政治思想の芽が幕末に出た」と描いている。⁴⁰ 一時的とはいえ「共和国」が存在したとするならば、これもそうした自治の精神の証拠として重要というわけである。

しかも羽仁の場合、戦後マルクス主義者たちがこうした方針を確認する以前、戦前の著書『ミケルアンヂェロ』（岩波新書 一九三九年）のころからヨーロッパのルネサンス期自由都市の共和政を理想としており、やがては日本も市民による自由都市共和制連邦になるという持論を唱えていた。そのため、羽仁は中世の山城国一揆を「日本の国民議会の最初のもの」、堺の自治は「自由都市共和制を実現した」事例として高く評価する。⁴¹ これらと同様に、羽仁や井上は士分にしか投票を認めなかった榎本の「共和国」の内実を評価しないにもかかわらず、日本が共和政となる前兆、内在性の発露としてその存在だけはおおいに注目したのである。

参議院議員・文明批評家的な活動が増えた羽仁と異なり、井上はその後数々の著作で「共和国」に言及

しつづけた。岩波新書の『日本の歴史』中巻（一九六五年）、中央公論社の『日本の歴史』の第二〇巻・明治維新（一九六六年）においても、榎本の「半封建的共和国」を紹介している。特に、中央公論社版『日本の歴史』が戦後を代表するベストセラーになり、ハードカバー・ペーパーバック・文庫と形を変えて今日まで読み継がれているのは周知のとおりである。

以上に見たごとく、「共和国」言説が普及するに際して、木村毅と並び羽仁五郎や井上清が果たした役割は相当に大きかったと考えられる。在野の歴史家であった木村に対して、羽仁や井上は戦後歴史学をけん引したマルクス主義の理論家であり、戦後を代表する文化人でもあった。そうした権威を帯びているゆえに、彼らの語る「共和国」のことは、木村以上に影響力があった可能性は十分に認められよう。

思えば、戦前の皇国史観の否定から始まった戦後の歴史学は、天皇制や国家の統一性を忌避する志向が強かった。井上が、尖閣諸島が日中間の係争地となった際、これが中国領であることを証明しようと躍起になったことはよく知られている。また、戦後八重山諸島に一時的に存在した自治組織を「八重山共和国」と評価したのも、歴史学者大江志乃夫であった。⁴²「日本は単一民族、単一国家」であるという「常識」に挑戦しつづけた中世史家網野善彦についてはいうまでもないだろう（網野も榎本が「共和国」樹立を試みたと言及したことがある）。⁴³

「はじめに」では「内国植民地化」された北海道のひそやかな自己主張として「共和国」言説は語られたとする田中彰の説を紹介した。だが、本節で確認したとおり、「共和国」言説は、むしろ道外の歴史学者たちがみずからの思想を北海道の「開拓」イメージに重ねて託した言説という側面が強いのではないだろうか。「共和国」言説は単なる「俗説」ではなく、戦後歴史学という学問の世界の産物という側面が認められるのである。

おわりに

本稿は、「蝦夷共和国」言説が普及するに至った経緯について確認してきた。

もともと蝦夷島政権を「共和国」と称し始めたのは当時日本に滞在していた西洋人たちであった。明治以後、西洋人たちが著したものを目にした人々は、蝦夷島政権を「共和国」と認識する向きがあることを知る機会があった。しかし、近代日本においてそれを公言することはタブー視されていたため、昭和戦前期までの文献に蝦夷島政権を「共和国」と称するものはほとんど出てこない。

タブーから解放された戦後になると状況は一変し、木村毅をはじめ在野の歴史学者たちによって「共和国」の存在⁴⁴が強調されたのは従来指摘されてきたとおりである。ただし、「共和国」の存在⁴⁵を知らしめるに与っては、戦後の歴史学界をリードしてきた羽仁五郎・井上清らマルクス主義の歴史学者たちの熱心な活動も忘れてはならないであろう。私見では、彼らの方こそ在野の歴史家たち以上に「共和国」言説の浸透に貢献した可能性がある。

最後に、現在の「共和国」言説をめぐる状況について付言しておきたい。歴史学の世界でこそとうに「俗説」とされている「共和国」の存在も、他の学問分野に目を転じるといまだ真実として語られる場合がある。最近も、大手出版社から「蝦夷共和国一五〇年記念出版」をうたった榎本武揚の評伝が新たに世に出たばかりである。そればかりか、学生募集の広告に「エゾ共和国」の名を掲げる大学すら存在するのである。

ネット世界はさらに問題は根深く、二〇〇〇年代には菊の紋章の上に七芒星を重ねた「蝦夷共和国」の「国旗」なるものが掲載されたことがあり、一時はフリー百科事典 Wikipedia⁴⁴などでも掲載されていた。探して

みると、今でもあちこちにこの「国旗」が掲げられているサイトがあることに気が付く。

近年の偽史言説に関する研究では、「良識ある人が冗談と笑い飛ばす偽史も、ある種の条件が揃った場合、あたかも本来存在した実態を持つ歴史であるかのように振る舞い始め、わたしたちの社会に大きな影響を及ぼしかねない」という危険性を指摘している。⁴⁵ 実態と乖離した「共和国」という「俗説」もこれと同様の危険性をはらんでいると見てよいだろう。

それでは、ネット社会の現代にあつて、世にあふれる「俗説」とどのように付き合っていけばよいのであろうか。その答えを導き出すことは簡単ではないが、少なくとも「俗説」の流布を研究と無関係として無視する態度は、もはや許されないのではないだろうか。

〔注〕

1 たとえば、鵜飼政志は「彼らを蝦夷共和国（政權）かのようにみなすことは、誤った俗説でしかない」と評している。『明治維新の国際舞台』（有志舎 二〇一四年）二〇五頁。

2 井黒弥太郎「箱館戦争新論」（『軍事史学』第一七号 一九六九年）二九頁。

3 田中彰「壮大なる幻影・蝦夷共和国の虚実」（『現代視点 戦国・幕末の群像 榎本武揚』旺文社 一九八三年）五〇頁。

4 佐々木克「榎本武揚―幕臣の戊辰戦争―」（同編『それぞれの明治維新―変革期の生き方―』吉川弘文館 二〇〇〇年）、萩原延壽『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄―』七（朝日新聞社 二〇〇〇年）、前掲『明治維新の国際舞台』。

5 一九一七（大正六）年の講演で「当時榎本さんは北海道を日本本島から分離して一独立国を建立し、之を共和政治で治めてゆかうとの考を持つて居られたとの事である」と言及した。また、一九三七（昭和一二）年における講演では、これを「共和国」と明言している。「実験論語処世談（廿二）」竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第一五卷（渋沢栄一伝記資料刊行会 一九五七年）一九四頁。渋沢栄一講述／尾高維孝筆録『論語講義』（二松学舎大学出

- 版部 一九七五年) 二二三頁。
- 6 NHK歴史誕生取材班編『歴史誕生』一三(角川書店 一九九二年) 一二九・一五四頁。また、ウィリアム・ス
テール「アメリカから見た日本の南北戦争」(田中彰編『幕末維新の社会と思想』吉川弘文館 一九九九年)
三五二・三五三頁。
- 7 最初に「共和国」と言い出したのはアダムスだとする説が散見される。これは木村毅が「共和国」に言及したもつ
とも古い文献としてアダムスの著書を紹介したことによる誤解にすぎないであろう。
- 8 木村毅「序」(亀井俊介訳『ミカド』岩波文庫 一九九五年)。
- 9 庄司三男訳『ヘールツ日本年報』(新異国叢書第Ⅱ輯5 雄松堂出版 一九八三年) 七頁。
- 10 『同右』七頁。
- 11 前掲「箱館戦争新論」二八頁。
- 12 西田毅『竹腰与三郎』(ミネルヴァ書房 二〇一五年) 一〇二頁。
- 13 竹越与三郎『新日本史』上(民友社 一九九一年) 一二四頁。
- 14 「座談会「五稜郭血書」―歴史劇とは何か―」(『久保栄研究』第一〇号 一九六九年) 四頁。
- 15 久保栄『五稜郭血書』(影書房 二〇〇九年) 八四・八五頁。
- 16 尾崎秀樹「北海道共和国の残像―「五稜郭血書」の位置―」(『久保栄研究』第一〇号 一九六九年) 三五頁。
- 17 家永三郎「日本における共和主義の伝統」(『思想』第四一〇号 一九五八年)。
- 18 木村毅『文明開化―青年日本の演じた悲喜劇―』(至文堂 一九五四年) 二二四頁。
- 19 鮎沢信太郎「北海道共和国と怪外人スネル」(『礎』第一卷第七号 一九五一年) 五八頁。
- 20 木村毅「江戸・東京の男たち」(『国文学―解釈と鑑賞―』第二八卷第二号 一九六三年) 四七頁。
- 21 北海道新聞函館支社編『五稜郭物語』(函館観光協会 一九六六年) 六二頁。
- 22 前掲「箱館戦争新論」一九頁。
- 23 なお、司馬遼太郎『燃えよ剣』(一九六四年)・安部公房『榎本武揚』(一九六六年)といった文学作品や「明治

- 百年記念事業」をめぐる各界の議論なども当然大きな影響力をもったと想像されるが、筆者にはまだこれを論じる準備がないため、本稿では考察対象に含まない。
- 24 木村は大学で教鞭をとったこともあるが、「投書家あがりの文士」を自称し、晩年まで「在野」性にこだわったのは自他ともに認めるところであった。「在野の歴史家」に数えることも許されるであろう。
- 25 前掲『文明開化』二二六頁。
- 26 木村は「共和国」のことを調べるため函館に調査に行ったと記すが（後述）、これは「大正十四年の夏」であったという。前掲『文明開化』二二四頁。
- 27 木村毅・林茂「対談 明治文化を語る」（『文学』第四四卷第二号 岩波書店 一九七六年）三一・三二頁。
- 28 石井孝「増訂明治維新の国際的環境」分冊三（吉川弘文館 一九七三年）九四二頁。ただし、尾佐竹の説は石井によって否定されている。
- 29 木村毅『私の文学回顧録』（青蛙房 一九七九年）三四頁。
- 30 木村毅「明治の政治に及ぼしたジョージ・ワシントンの影響」（『法政史学』第六号 一九五三年）二九頁。
- 31 木村毅『大東京五百年文化史話―開けゆく江戸から東京へ』（恒文社 一九七九年）五〇八頁。もとは昭和三十一年（一九五六）に『毎日新聞』都内板に連載されたもの。
- 32 たとえば、「とにかく、それはアジアにおける最初の共和国であった」（『梅棹忠夫著作集』第七巻 中央公論社 一九九〇年 一五四頁）「アジアにおける最初の共和国として、たいへん興味あるケースでもあるんですけど……」（『安部公房全集』二二 新潮社 一九九九年 四三二・四三三頁）など。
- 33 『羽仁五郎歴史著作集』第三巻（青木書店 一九六七年）二三頁。初出は『毎日新聞』一九四六年一月一三―一五日出という。
- 34 井上清『くにのあゆみ批判―正しい日本歴史―』（解放社 一九四七年）二五七―二五八頁。なお、「全軍の選挙」とあるのは誤りである。
- 35 奥山亮『新考北海道史』（北方書院 一九四九年序）一〇〇頁。

- 36 『同右』七頁。
- 37 羽仁五郎『私の大学 学問のすすめ』（講談社現代新書 一九六六年）一〇一～一〇三頁、同「久保栄の孤立」（『テアトロ』第二七六号 一九五八年）四～六頁。
- 38 「座談会「五稜郭血書」―歴史劇とは何か―」（『久保栄研究』第一〇号 一九六九年）七頁。
- 39 小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉―戦後日本のナショナリズムと公共性―』（新曜社 二〇〇二年）一二三頁。
- 40 前掲『くにあゆみ批判―正しい日本歴史―』二五二頁
- 41 羽仁五郎・井上清『歴史に何を学ぶか』（現代評論社 一九七三年）一六一頁。
- 42 大江志乃夫『日本の歴史』第三二巻・戦後改革（小学館 一九七六年）七六・七七頁。なお、大江は「明治維新のときの隠岐島の小共和国成立」や「西南戦争のときの熊本県山鹿地方の小共和国」にも言及している。
- 43 網野善彦『日本社会の歴史』下（岩波新書 一九九七年）一四九頁。
- 44 典拠が怪しいということになって削除されたようである。Wikimedia Commonsにおいて、削除をめぐる議論のやり取りを読むことが出来る（二〇一七年七月五日閲覧 https://commons.wikimedia.org/wiki/Commons:Deletion_requests/File:Fictional_Flag_of_the_Republic_of_Ezosvg）。
- 45 小澤実「公開シンポジウム 近代日本の偽史言説 その生成・機能・受容」（『立教日本学研究所年報』第一四・一五号 二〇一六年）九・一〇頁。